幼児の運動能力と協同的な運動遊びならびに 社会的スキルの関連

榎本 夏子¹ 中道 直子²

The relationship between motor ability, cooperative physical play and social skills in young children

Natsuko Enomoto¹ and Naoko Nakamichi²

abstract

It has been found that motor ability and motor play in early childhood are associated with the development of social skills. However, the relationships among these three factors have not yet been clarified. In this study dealt with motor skills, cooperative physical play, and social skills in early childhood and examined whether motor skills or cooperative physical play was more predictive of social skills at age 6.

A short-term longitudinal study of 31 kindergarteners (15 male and 16 female) in Chiba Prefecture was conducted, including children between the ages of 5 and 6 years. Motor ability was measured and motor play was observed at 5 years of age, and social skills were assessed at 6 years of age.

The results of this study showed that children with high motor ability frequently engage in motor play during the year, but do not necessarily participate actively in cooperative physical play with their peers. Furthermore, participation in cooperative physical play during at 5 years of age, rather than high motor ability at 5 years of age, predicts social skills at 6 years of age. Thus, the results of this study indicate that active participation in cooperative physical play in daily life is important for the development of social skills in young children.

Key words : child, motor ability, physical play, social skill, cooperativity

幼児, 運動能力, 運動遊び, 社会的スキル, 協同性

I はじめに

1. 背景

近年, 幼児の運動能力は 1997 年以降, 低下した状態のまま推移している (森ほか, 2010)。こうした中, 文部科学省は 2012 年に「幼児期運動指針」を施行し, 幼児期の習慣的で多様な運動の重要性を強調した (文部科学省, 2012)。この幼児期運動指針では, 幼児期に運動能力を高めることは, 肥満や痩身を予防し, 丈夫でバランスの取れた体を

育むといった健康の維持増進だけでなく, 自己の抑制や, 仲間とコミュニケーションを取り合うといった社会的スキルの発達にもつながることが指摘されている。社会的スキルとは, 「一定の状況化で重要な社会的結果を予測するのに役立つ諸行動 (Gresham and Elliott, 1987)」である。この社会的スキルは, 「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」 (文部科学省, 2018 ; 厚生労働省, 2018) に含まれている, 幼児期に育まれるべき重要なスキルである。

¹ 日本体育大学大学院博士後期課程

² 東洋大学

¹ Doctoral Degree Program, Nippon Sport Science University

² Toyo University

2. 運動能力と社会的スキル

先行研究では、幼児期の運動能力が社会的スキルと関連することを示してきた。例えばPagani (2012) は、4歳児を対象に、運動能力と社会的スキルの関連を検討した。その結果、担任教師から運動能力が高いと評定された幼児は、精神的苦痛を感じにくく、友人を助けるなどの社会的行動をとり、クラスでの活動に積極的に参加しやすいことが示された。

日本国内の研究においても幼児期の運動能力と社会的スキルの関連が示されている。例えば杉原ほか(2010)は、全国の幼稚園66カ所、保育園43カ所、認定こども園1カ所に在籍する4～6歳児を対象に、幼児の運動能力と社会的スキルを含む特性の関連を検討した結果、運動能力が高い幼児は、自分に自信があり、遊び時間にはリーダーとして活動し、友達と仲良くできることが報告された。

しかしながら、幼児期の運動能力と社会的スキルとの間には、直接的な関連があるとは考えにくい。なぜなら、運動能力が高い幼児は、自ら鬼ごっこやボール遊びなどの仲間と一緒に協同して行う運動遊びに参加する中で、仲間との関わり方を学んでいると考えられるからである。実際、Cameron et al.(2016)は、レビュー論文の中で、運動能力が高い幼児は、仲間と一緒に運動やスポーツに参加しやすく、このような活動の中で社会的スキルを発達させているのではないかと推察している。しかしながら、運動能力、運動遊び及び社会的スキルの三者の関連を実証的に検討した研究はない。

3. 幼児の運動能力と運動遊びの関連

上記のように幼児の運動能力、運動遊び及び社会的スキルの三者の関連を検討した研究はないものの、二者の関連は先行研究によって既に報告されている。以下では、まず幼児の運動能力と運動遊びの関連を示した研究を紹介する。

運動遊びとは「遊びの中で活発に体を使う遊び」である(岩崎ほか, 2008)。いくつかの先行研究は、運動遊びを日常的に行うことにより、運動能力が高まることを示している。例えば、上述した杉原ほか(2010)は、幼児が自由遊び時間中に運

動遊びを行っている程度と彼らの運動能力の関連を検討した。その結果、保育者から自由遊び時間に運動遊びを「非常によくする」もしくは「よくする」と評定された幼児は、「ほとんどしない」や「あまりしない」と評定された幼児に比べ、運動能力が高いことを示した。

一方、運動能力の高さが、幼児を運動遊びに参加させやすくすることを示唆した研究もある。例えばHarriet et al.(2008)は、3～5歳児を対象に、運動能力と日常生活での高強度の身体活動との関連を検討した。その結果、運動能力が高い幼児は、運動能力が低い幼児に比べて、日常的に高強度の身体活動を行っていることが明らかにされた。上記のような先行研究の結果を踏まえると、運動能力と運動遊びは、相互関係にあると考えられる。すなわち、幼児が運動遊びを行うことで彼らの運動能力が育まれることもあるが、運動能力が高いことによって幼児は運動遊びに参加しやすくなることもあるといえる。

4. 幼児の運動遊びと社会的スキルの関連

幼児の運動遊びと社会的スキルの関連に関する先行研究は少ない。その先駆的な研究として岩崎・朴(2011)は、幼稚園に在籍する4, 5歳児を対象に、彼らの日常生活における運動遊びの技能と社会的スキルの関連を検討した。その結果、5歳児において、運動遊びの技能に優れている幼児は、社会的スキルが高いことが示された。さらに、Lobo and Winsler (2006)は、4歳児を対象に、ダンスを中心とした運動遊びプログラムの介入研究を実施した。対象児は運動プログラムを実施する介入群と実施しない対照群にわけられ、介入群には、8週間の運動遊びプログラムを実施した。介入群と対照群のどちらもプログラムの事前事後に、担任教師および保護者が社会的スキルの評価を行い、介入群と対照群の社会的スキル得点の比較を行った。その結果、対照群に比べ、運動遊びプログラムを実施した介入群の社会的スキルが有意に向上した。このように、少数であるがいくつかの最近の先行研究が、幼児期に運動遊びを積極的に行うことは彼らの社会的スキルを高めることを示しつつある。

5. 目的

前述のように、先行研究では、運動能力と社会的スキル (Pagani, 2012; 杉原ほか, 2010)、運動能力と運動遊び (杉原ほか, 2010; Harriet et al., 2008)、運動遊びと社会的スキル (岩崎・朴, 2011; Lobo and Winsler, 2006) のそれぞれ二者間の関連を明らかにしてきた。しかしながら、これら三者の関連は未だ実証的に検討されていない。

そこで本研究では、幼児期の運動能力、運動遊び、そして社会的スキルの三者の関連を直接的に検討することを目的とした。具体的には次の2つを検討した。第1に、年中の時点で運動能力が高い幼児は、運動遊びの中でも、仲間と一緒に協同的な運動遊びを行っているかどうかを検討した。第2に、年中時の運動能力と協同的な運動遊びのどちらがより、年長時の社会的スキルと関連があるのかを検討することを目的とした。

II 方法

1. 研究の概要

千葉県内の幼稚園に通う幼児31名(男児15名、女児16名)が研究に参加した。本研究は短期縦断研究であり、運動能力測定及び協同的な運動遊びの観察は、年中時点の2018年10月から12月に実施した(平均:5歳0カ月, SD:3.09カ月)。社会的スキルの評定は、年長時点の2019年6月に実施した(平均5歳6カ月, SD:3.14カ月)。

2. 測定項目

1) 運動能力測定

文部科学省が推奨している運動能力測定項目の中から、多くの先行研究で実施されており(杉原ほか, 2004; 及川, 2013)、幼児の基本的な運動能力である「走る」「跳ぶ」「投げる」を測定した。具体的には、25m走、立ち幅跳び、テニスボール投げの測定を行った。測定方法は、杉原ほか(2004)が示す運動能力調査と同様の方法を採用した。

2) 協同的な運動遊びの観察

本研究では、運動遊びの中でも、運動遊びの質、とりわけ仲間との協同性に着目した。観察は2カ月間実施し、一人当たり20回程度行われた。観察

時間は、一定であり、昼食後の自由遊び時間30分間に実施された。また、観察中に対象児の遊びの移行が見られた場合、その時点で観察されたものを遊びの形態として得点化した。

観察内容は第1に、杉原ほか(2010)が示した、自由遊び時間に行われている運動遊びの例を参考に、参加児が園での自由遊び時間において、運動遊びを行っているかどうかを観察した。得点化として、運動遊びをしていない場合0点、している場合を1点として、運動遊び得点を算出した(20点満点)。

第2に、運動遊びをしていて且つ、仲間とのかかわりの度合いを検討するため、Parten (1932)の社会的参加項目を使用した。得点化の方法を表1に示す。自由遊び時間に、運動遊びをしていない場合は0点、「傍観者」「1人遊び」をしている場合は0点、運動遊びをしていて且つ、「平行遊び」をしている場合1点、運動遊びをしていて且つ、「連合遊び」をしている場合2点、運動遊びをしていて且つ、「協同遊び」をしている場合3点として、協同的な運動遊び得点を算出した(60点満点)。

欠損値については、対象児が欠席した場合、その子どもの協同的な運動遊び得点の一回の観察あたりの平均値を算出し、その平均値を代入した。観察における信頼性の検討については、幼児の遊び観察のトレーニングを受けた観察者2名が同時に観察を行い、カッパ係数を求めた。その結果、実質的に一致しているとみなされる高いカッパ係数が確認された($k=.72$, $r=.68$, $p<.01$)。

3) 幼児用社会的スキル尺度

金山ほか(2014)によって作成された幼児用社会的スキル尺度を使用した。下位尺度は、「友だちをいろいろな活動に誘う」「自分から仲間との会話をしかける」といった主張スキル4項目、「ゲームなどの活動中に、自分の順番を待つことができる」「教師の指示に従う」といった協調スキル4項目、「仲間からいやなことを言われても、適切に対応する」「仲間とのいざこざ場面で、自分の気持ちをコントロールする」といった自己統制スキル4項目の計12項目から構成された。それぞれ、日頃の幼児の行動として見られる度合いを「非常によくみられる」「よくみられる」「ときどきみられ

表 1 遊びの種類と評価得点

遊びの種類	観察得点	評 価 内 容
運動遊び 以外の遊び	0 点	運動遊び以外の遊びを行っている。
傍観者	0 点	大半の時間を他の子どもたちが遊ぶのを見て過ごす。傍観している子どもたちに話しかけたりするが、明らかに遊びの中には入っていない。
1 人遊び	0 点	一人独立して運動遊びを行っている。 他の子どもに近寄ったり、話しかけることはなく自分の遊びに専念している。
平行遊び	1 点	他の子どもたちの近くで、一人で運動遊びをして遊んでいる。しかし、他の子どもの活動に影響を与えたり、変えようとしたりはしない。
連合遊び	2 点	運動遊びの中でその遊びに関する会話がある。 しかし、全員が同じか、類似の活動をしており、役割が分担されることはない。
協同遊び	3 点	組織化された運動遊び。リーダーが存在し、共通の目標を達成するための役割分担もみられる。ルールを意識した遊びを行っている。

る」「少しみられる」「まったくみられない」の5件法で評定した。これを以下では社会的スキル得点(60点満点)とした。なお評定は、各クラスの担任保育者3名によって行われた。

3. 分析方法

本研究でははじめに、年中時の運動能力と運動遊び及び協同的な運動遊び、年長時の社会的スキルの記述統計を算出した。その上で、先行研究においてこれらに男女差があることが報告されていることから(森ほか, 2010; 鷹野・坂岡, 1982; 金山ほか, 2014), それぞれの性差を対応のないt検定によって検討した。

次に、年中時の運動能力と協同的な運動遊びの関連の検討のために、これらの相関係数(Pearson)を算出した。

さらに、年中時の運動能力と協同的な運動遊びのどちらが年長時の社会的スキルをより強く予測するのかを検討するために、年中時の月齢、年中時の運動能力総計、年中時の協同的な運動遊び得点をそれぞれ独立変数、年長時の社会的スキル得点を従属変数として、重回帰分析(強制投入法)を行った。分析には、IBM SPSS statistics 22.0を使用し、統計学的有意差については、いずれの場合も5%未満の水準で判定した。

4. 倫理的配慮

園の責任者に調査協力依頼を行い、上記の子どもたちが研究に参加することの同意を書面で得た。保護者には、オプトアウトとして、調査に関するポスターを一定期間掲示し、参加拒否の申し出を受け付け、保護者から参加拒否の申し出がなかった子どもを調査対象とした。子ども自身にも簡単に調査に関する説明を行い、口頭で同意を得てから実施した。なお、本研究は、日本女子体育大学研究倫理審査会において、承認を得た(申請番号 2018-20)。

Ⅲ 結 果

1. 年中時の運動能力各種目、運動遊び及び協同的な運動遊び、年長時の社会的スキルの記述統計

年中時の運動能力各種目、運動遊び得点及び協同的な運動遊び得点、年長時の社会的スキル得点の記述統計を表2に示した。各項目の性差を検討するために対応のないt検定を行った結果、運動能力では、25m走のタイムは、男児がより速く走ることができ、テニスボール投げは、男児がより遠くにボールを投げる傾向を示した。一方で、立ち幅跳びでは有意な性差はみられなかった。運動

表 2 本研究の対象者の記述統計

	男児 (n=15)	女児 (n=16)	p ^a	r ^b
年中時 25 m 走 (秒)	6.5±0.6	7.2±0.9	*	0.44
年中時 テニスボール投げ (m)	4.5±3.2	2.9±0.8	†	0.43
年中時 立ち幅跳び (cm)	91.5±24.2	80.1±22.4		0.25
年中時 運動遊び得点 (点)	18.8±1.7	15.0±5.4	*	0.54
年中時 協同的な運動遊び得点 (点)	30.0±11.1	23.9±12.4		0.27
年長時 社会的スキル得点 (点)	48.2±4.1	47.4±9.3		0.06

^a 対応のない t 検定の結果を示す。*p<0.05, †p<0.1

^b 効果量の値を示す。

表 3 年中時の運動能力, 運動遊び及び協同的な運動遊びの相関係数

	年中時	運動能力総合 z 得点
年中時 運動遊び z 得点		0.37*
年中時 協同的な運動遊び z 得点		0.33

*p<0.05

表 4 年中時の運動能力, 運動遊び及び協同的な運動遊びと年長時の社会的スキルの相関係数

	年長時	社会的スキル得点
年中時 運動能力総合 z 得点		0.32
年中時 協同的な運動遊び得点		0.44*

*p<0.05

遊び得点は, 女児に比して男児の得点が有意に高かった。協同的な運動遊び得点は, 有意ではないものの, 女児に比して男児の得点が高かった。社会的スキル得点には, 有意な性差はなかった。

2. 年中時の運動能力と運動遊び及び協同的な運動遊びの関連

運動能力総合得点を算出するために, 各項目を男女別に z 得点化し, 合計した得点を運動能力総合 z 得点とした。25 m 走は速いほど, 数値が小さくなるため, 算出した 25 m 走 z 得点に -1 をかけ, 符号を逆にした。また, 運動遊び得点, 協同的な運動遊び得点もそれぞれ男女別に z 得点化し, それぞれ運動遊び z 得点, 協同的な運動遊び z 得点とした。そして, 年中時に運動能力が高い幼児は, 協同的な運動遊びを行っているのかを検討するために, Pearson の相関係数を算出した (表 3)。その結果, 運動能力総合 z 得点と運動遊び z 得点に有意な正の相関があった。一方で, 運動能力総合

z 得点と協同的な運動遊び z 得点には有意な相関はなかった。

3. 年中時の運動能力及び協同的な運動遊びと年長時の社会的スキルの関連

運動能力, 協同的な運動遊び, 社会的スキルの関連を検討するため, Pearson の相関係数を算出した。表 4 に示されるように, 年中時の運動能力総合 z 得点と年長時の社会的スキルに有意な相関はなかった。一方で, 年中時の協同的な運動遊び得点と年長時の社会的スキルに有意な正の相関があった。

次に, 年中時の運動能力と協同的な運動遊びのどちらがより社会的スキルと関連しているのかを検討するため, 年長時の社会的スキル得点を従属変数, 年中時の運動能力総合 z 得点, 年中時の協同的な運動遊び z 得点を独立変数, 年中時の月齢, 性別を制御変数とした重回帰分析 (強制投入法) を行った (表 5)。その結果, 年中時の協同的な運

表 5 年中時の運動能力及び協同的な運動遊びと年長時の社会的スキルの関連

	年長時	社会的スキル得点
	β	R^2
		0.25
性別	-0.04	
年中時 月齢	-0.16	
年中時 運動能力総合z得点	0.27	
年中時 協同的な運動遊び得点	0.41*	

* $p < 0.05$

動遊びz得点が年長時の社会的スキル得点を有意に予測した。残差分析の結果、標準化残差の最小値が-2.458、最大値が1.245であった。標準化残差が ± 3 の範囲内であることから、集団間に外れ値がないことが確認された。さらに、多重共線性の問題を確認するためにVIF値を採用した。本研究の結果、VIF値が5を超える値はなく、最も高い値で1.439であった。このことから、本研究のモデルに共線性の問題がないことが確認された。

Ⅳ 考 察

本研究では、運動能力、協同的な運動遊び、社会的スキルの三者を扱い、年中時の運動能力と協同的な運動遊びのどちらがより年長時の社会的スキルを予測するのかを検討した。今まで二者間でのみ検討されていた運動能力、運動遊び、社会的スキルを扱い、さらに、運動遊びの中でも仲間とのかかわりに着目し、Parten (1932)の社会的参加項目を使用して観察を行ったことに特徴がある。その結果、運動能力の高さよりも日常生活での協同的な運動遊びへの積極的な参加が、幼児の社会的スキルの発達により強く関連することが示唆された。

1. 年中時の運動能力

本研究では、25m走、テニスボール投げ、立ち幅跳びを測定した。本研究の参加児の25m走と立ち幅跳びの記録は、文部科学省(2012)によって示された全国平均基準値内であった(25m走：男児6.6-7.1秒、女児6.8-7.4秒；立ち幅跳び：男児85-103cm、女児78-95cm)。一方で、本

研究の対象児のテニスボール投げの記録は、全国平均基準値より若干低かった(男児5.0-7.0m、女児4.0-4.5m)。これらのことから、本研究の対象児は、テニスボール投げの記録が若干低いものの一般的な運動能力を持つ集団であるといえる。

また本研究では、いくつかの運動能力項目に性差があった。25m走では男児が女児より速く走ることができ、テニスボール投げでは男児が女児より遠くにボールを投げる傾向を示した。一方、立ち幅跳びでは、有意な性差はなかった。森ほか(2010)は、4歳、5歳、6歳児を対象とした運動能力測定において、男児は女児に比べ、各種目の記録が有意に高いことを報告しており、このように本研究の結果は、先行研究(森ほか、2010)と同様に、幼児期の運動能力には性差があり、女児より男児の運動能力が高いことが示された。

2. 年中時の協同的な運動遊び

本研究ではまず、参加児が年中の時点において、自由遊びの時間に運動遊びを行った頻度を測定した。その結果、20回の観察において、本研究の対象児は平均16.84回運動遊びを行っていた。日本小児保健協会(2011)は、幼児健康度調査において、園内で運動遊びをよく行っている幼児は全体の59%であることを報告している。日本小児保健協会(2011)の結果と本研究の結果を直接比較することはできないが、本研究の対象児は運動遊びを比較的頻繁に行っていた集団である可能性がある。

また、本研究において、男児は女児より自由遊び時間中に運動遊びを頻繁に行っていた。これは他の先行研究の結果と一致している。例えば、鷹

野・坂岡(1982)は、幼稚園での自由遊び時間において、男児は女児より運動強度が高く、活動量の多い遊びを行っていることを報告している。加えて本研究の結果は、新たな知見として、有意ではないものの、男児は女児より協同的な運動遊びの実施頻度も高い傾向にあった。このように本研究の結果は、男児は女児より運動遊びのみならず、仲間との協同的な運動遊びにも積極的に参加しやすいことを示すことによって、先行研究(鷹野・坂岡, 1982)の結果を拡張した。

3. 年中時の運動能力と運動遊び及び協同的な運動遊びの関連

本研究の第1の目的は、運動能力が高い幼児は協同的な運動遊びを行っているのかを検讨することであった。本研究の結果は、年中時に運動能力が高い幼児は、運動遊びは頻繁に行っているものの、必ずしも仲間と協同的な運動遊びを行っているわけではないことを示した。このように本研究の結果は、運動能力が高い幼児は、仲間と一緒に運動やスポーツに参加しやすいという Cameron et al.(2016)の推測を支持しなかった。この理由として、協同的な運動遊びを行うためには、幼児が活発に体を動かして遊ぶことを好むことに加えて、それを一人ではなく、仲間と一緒に行うことを好む必要であると考えられる。ゆえに、本研究の結果は、運動能力が高い幼児が、必ずしも協同的な運動遊びを好み、それを頻繁に行うわけではないことを示唆するものであると考えられる。

4. 年中時の運動能力及び協同的な運動遊びと年長時の社会的スキルの関連

本研究の第2の目的は、年中時の運動能力と協同的な運動遊びのどちらがより年長時の社会的スキルと関連しているのかを検讨することであった。相関分析の結果、年中時の運動能力と年長時の社会的スキルに中程度の正の相関が認められたものの、その相関関係は有意ではなかった。一方、年中時の協同的な運動遊びと年長時の社会的スキルには有意な正の相関があった。さらに重回帰分析の結果、年中時の協同的な運動遊びと、年長時の社会的スキルに有意な関連が確認された。このように本研究の結果は、年中時の運動能力の高さ

よりも協同的な運動遊びへの参加が、年長時の社会的スキルと強く関連していることを示している。

本研究と Pagani (2012) や杉原ほか(2010)とで異なる結果が得られた理由として、扱った要因数の違いが挙げられる。Pagani (2012) や杉原ほか(2010)はいずれも、運動能力と社会的スキルの二つの要因について検討していた。一方で本研究は、運動能力、協同的な運動遊び、社会的スキルの三つの要因を扱い、その関連性を検討した。三つの要因を扱うことで、運動能力と社会的スキルの関連よりも、協同的な運動遊びと社会的スキルの関連がより強かったことから、運動能力と社会的スキルに関連がみられなかったと考えられる。前述のように、本研究においても、有意ではないものの、年中時の運動能力と年長時の社会的スキルとの間に中程度の正の相関があったことを踏まえると、運動能力と社会的スキルに全く関連がないわけではないと考えられる。

本研究によって示された興味深い結果は、幼児の持っている運動能力ではなく、日常的に仲間と協同して行う運動遊びに参加することが、より社会的スキル関連していることを示したことにある。この理由として、協同的な運動遊びには、社会的スキルを発達させる要因が多く含まれていることが挙げられる。

本研究において、対象児がサッカーを成立させるために、誰がシュートを打つか、誰がゴールキーパーになるか、といった話し合いが生まれる場面が観察された。話し合いの中では、リーダーが存在し、役割分担が行われていくが、納得できない子どもも現れるなど、葛藤場面も観察された。子どもたちはこのような遊びの中で自分の意見の主張や抑制をしながら、社会的スキルを発達させていったと考えられる。鈴木(2017)もまた、ドッジボールなどの協同的な運動遊びの中で、自己決定や他者との調整、自発的な規律調整を経験することができると述べている。このように本研究の結果は、運動能力ではなく、仲間と協同して行う運動遊びへの積極的な参加が、彼らの社会的スキルを発達させる一つの重要な要因である可能性を示した。

5. 本研究の限界および今後の研究課題

本研究では、対象児が31名であり、サンプルサイズの問題が挙げられる。一方で、サンプルサイズが少ないものの、幼児期の運動遊びの中でも、協同的な運動遊びの重要性を示すことができたことは重要な知見であるといえる。今後は対象児を増やして検討する必要があると考えられる。

また、本研究では、どのような子どもたちが協同的な運動遊びを頻繁に行っているのかは明らかにすることができなかった。幼児期の協同的な運動遊びへの積極的な参加には、生活習慣や保護者や保育者の遊びへの関心、遊び場の確保、頻繁に遊ぶ友達の人数など、多くの要因が影響していると考えられる。よって今後は、幼児の起床・就床時刻やスクリーンタイム、日常的に遊ぶ友達の人数、保護者の遊びへの関心、遊び場の有無といった質問項目を設定し、協同的な運動遊びへの積極的な参加との関連を検討していくことが求められる。実際、村瀬・落合（2007）は、海や山といった自然環境や広場や空き地で遊ぶことが運動遊びを親しむことへの強い促進要因であり、加えて、親や先生など大人との関わりも運動遊びを親しむことへの促進要因となることを示している。すなわち、自然環境や生活環境が遊びへの参加に影響を及ぼすことが示唆される。したがって、今後の研究において、幼児期の生活及び環境要因と協同的な運動遊びへの参加についてさらに詳細に検討する必要があるだろう。

V 結 論

本研究において、年中時に運動能力の高い幼児は運動遊びを頻繁に行っているものの、必ずしも仲間と一緒に協同して行う運動遊びに積極的に参加しているわけではなかった。さらに、年中時の運動能力の高さと年長時の社会的スキルに直接的な関連はなく、年中時の協同的な運動遊びへの参加が年長時の社会的スキルに強く関連することが明らかになった。このことから、運動能力の高さではなく、日常生活での協同的な運動遊びへの積極的な参加が、幼児の社会的スキルの発達により重要である可能性が示唆された。

謝辞

本研究の実施にあたり、対象者としてご協力いただいた子どもたちと調査園の先生方に、深謝の意を表したい。また、的確な助言をいただいた野井真吾氏（日本体育大学）にも、感謝の意を表したい。

文 献

- Cameron, E. C., Elizabeth, A. C., Murrah, M. W., Grissmer, D. W. (2016) How are motor skills linked to children's school performance and academic achievement? *Child Dev Perspect*, 10, 93-98
- Gresham, F. M., Elliott, S. N. (1987) Social skill deficits of learning-disabled student : issues of definition, classification, and assessment, *Journal of Reading, Writing, and Learning Disabilities*, 3, 131-148
- Harriet, G. W., Karin, A. P., Jennifer, R. O., Marsha, D., Kerry, L. M., William, H. B., Russell, R. P. (2008) Motor skill performance and physical activity in preschool children, *Obesity*, 16, 1421-1426
- 岩崎洋子, 朴淳香 (2011) 幼児期の運動と園での生活・遊び技能の関連-3-, 日本女子大学紀要, 58, 11-15
- 岩崎洋子, 吉田伊津美, 朴淳香, 鈴木康博 (2008) 保育と幼児期の運動遊び, 萌文書林
- 金山元春, 金山佐喜子, 磯部美良, 岡村寿代, 佐藤正二, 佐藤容子 (2014) 幼児用社会的スキル尺度・保育者評定版の改訂, 高知大学教育実践研究, 28, 14-19
- 厚生労働省 (2018) 幼児期の終わりまでに育ってほしい幼児の具体的な姿, https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00010420 (参照日: 2020年3月30日)
- Lobo, Y. B., Winsler, A. (2006) The effects of a creative dance and movement program on the social competence of head start preschoolers, *Social Development*, 15, 501-519
- 村瀬浩二, 落合優 (2007) 子どもの遊びを取り巻く環境とその促進要因-世代間を比較して-, 体育学研究, 52, 187-200
- 森司朗, 杉原隆, 吉田伊津美, 筒井清次郎, 鈴木康弘, 中本浩揮, 近藤充夫 (2010) 2008年の全国調査からみた幼児の運動能力, 体育の科学, 60, 56-66
- 文部科学省 (2012) 幼児期運動指針, <http://www.mext>

- go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319192.htm
(参照日: 2020年3月30日)
- 文部科学省 (2018) 幼児期の終わりまでに育ってほしい幼児の具体的な姿, https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm (参照日: 2020年3月30日)
- 日本小児保健協会 (2011) 幼児健康度に関する縦断的比較研究-平成22年度総括・分担研究報告書-, <http://airborne.main.jp/yoji/index.html> (参照日: 2020年3月30日)
- 及川直樹 (2013) 保育者による幼児の運動能力の推定の精度-実測値の評定に対する推定値の一致率に着目して-, 発育発達研究, 58, 52-62
- Pagani, L. S. (2012) Links between motor skills and indicators of school readiness at kindergarten entry in urban disadvantaged children, *J Educ Develop Psychol*, 2, 95-105
- Parten, B. M. (1932) Social participation among pre-school children, *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 27, 243-269
- 杉原隆, 森司朗, 吉田伊津美 (2004) 幼児の運動能力発達の年次推移と運動能力発達に關与する環境要因の構造的分析. 平成14~15年度文部科学省科学研究費補助金(基盤B)研究成果報告書
- 杉原隆, 吉田伊津美, 森司朗, 筒井清次郎, 鈴木康弘, 中本浩揮, 近藤充夫 (2010) 幼児の運動能力と運動指導ならびに性格との關係, *体育の科学*, 60, 341-347
- 鈴木裕子 (2017) 幼児期における運動遊びの心理社会的効果-5-6歳児のドッジボール遊びに着目して-, 愛知教育大学研究報告教育科学編, 66, 29-37
- 鷹野健次, 坂岡与夫 (1982) 園外保育自由遊びの活動量について, *体育科学*, 10, 198-201
- (受付: 2020年4月30日 受理: 2021年1月22日)

榎本 夏子 (えのもと なつこ)
日本体育大学大学院博士後期課程

2020年3月に日本女子体育大学大学院スポーツ科学研究科修士課程修了後, 同年4月より日本体育大学大学院博士後期課程に進学. 専門分野は, 発育発達学. 現在は, 子ども, 遊び, 社会性等をキーワードに研究活動に従事している.